

2024 年度「OIDAI 英語力診断テスト」と 英語学習実施状況調査の分析に基づく 共通教育機構科目「総合英語」と 「Online English Seminar」のカリキュラム評価 及び授業効果の検証に関する考察

松宮 新吾・稲富百合子・日野 信行・アリザデ メラサ

Evaluating the English Curriculum and Instructional Effectiveness
of Integrated English and Online English Seminar Classes:
A Statistical Analysis of OIDAI English Diagnostic Test Results
and an English Learning Survey

Shingo MATSUMIYA, Yuriko INADOMI, Nobuyuki HINO, Mehrasa ALIZADEH

【キーワード】 英語力診断テスト、英語学習実施状況調査、授業効果、カリキュラム評価

要旨

カリキュラム改訂後4年目となる共通教育機構の英語関係科目（総合英語と Online English Seminar）の授業効果を確認し、カリキュラム評価を行うために、2024 年度に実施した秋学期末 OIDAI 英語力診断テストと春学期末診断テストの通過率と、英語学習実施状況調査のデータを用いて検証した。その結果、問題項目の難易度を高めた秋学期末診断テストの合計通過率が有意に高くなっており、その効果量が一定レベルにまで達していることが判明した。また、コンテンツ科目として実施している総合英語の授業効果が「グローバル因子」として出現し、診断テスト結果に有意な影響を及ぼしていることが確認できた。本稿ではさらに、授業の運営と実践に関する報告を行う。

1. 「OIDAI 英語力診断テスト」及び英語学習実施状況調査の結果と分析（松宮）

1.1 はじめに

「OIDAI 英語力診断テスト」（以下、「診断テスト」という。）は、授業内容の理解度や定着度を測定するために、授業で使用している教材や題材と直接的に関連付けられた総括テスト（Summative Assessment）としての定期考査や、学習過程全般を通じて、学習者の学習状況を把握

し、指導者が適切なフィードバックを提供したり、指導の改善や学習支援を行うために必要な根拠を得る目的で実施される形成テスト（Formative Assessment）としての小テストや Quiz とは異なり、学習者の英語運用能力をより客観的に測定することを目的として設計されたものである。これにより、診断テスト項目の内容は、総合英語や Online English Seminar で取り扱われる題材や教材と直接的にリンクさせることなく、派生的要因を可能な限り排除し、学生の英語運用能力を測定・評価することができるものとして開発した。

そのため、診断テストは、グローバルニーズに応え、特定の目的に応じた英語力を一貫した基準で測定するために開発されている TOEIC、TOEFL、IELTS などの標準化されたテストのリスニングセクションとリーディングセクションに準じたテストとして、項目応答理論（IRT）に基づき、標準化（Standardization）、等化（Equating）、尺度化（Scaling）の手法を用いて、それぞれ一定レベルの一貫した基準で受験者の英語運用能力を評価・測定することができるよう設計されたものである。

1.2 研究の目的と方法

本研究では、TOEIC L&R 用の Practice Test に準じた診断テスト結果、及び、学習状況調査の分析を通じて、共通教育機構が所管している英語科目群（総合英語 1/2、Online English Seminar 1/2）のカリキュラム評価を試みるのが主たる目的である。

そのために、分析の対象として用いた診断テスト等のデータは、春学期末（7月）と秋学期末（12月）に実施した各診断テストから得られたデータ（表1）と、秋学期末診断テストの際に平行して実施した5段階評定尺度（Likert Scale）法による英語学習実施状況調査項目のデータである。

なお、松宮・稲富・日野・原（2024）が報告したとおり、7月実施の春学期末診断テストと12月実施の秋学期末診断テストの各項目難易度は、5ポイントから10ポイントのレンジで、秋学期末診断テストのほうがより難易度が高い質問項目が設定されている。

表1 秋学期末及び春学期末 OIDAI 英語力診断テストのテスト項目別通過率一覧

診断テスト	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月	12月	7月
テスト項目	合計正答率	合計正答率	リスニング正答率	リスニング正答率	語彙・表現正答率	語彙・表現正答率	文法・構文正答率	文法・構文正答率	リーディング正答率	リーディング正答率
受験者数	1496	1549	1496	1549	1496	1549	1496	1549	1496	1549
通過率平均値	42.9	40.3	39.9	39.3	45.7	48.1	42.7	42.2	47.3	37.5
標準偏差	17.54	14.79	17.56	15.72	25.08	24.55	24.81	22.90	26.49	22.57
最小値	0.0	3.2	0.0	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
最大値	97.1	92.1	96.9	91.7	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
歪度	0.54	0.67	0.72	0.79	0.49	0.29	0.59	0.50	0.40	0.62
尖度	-0.47	0.05	0.05	0.30	-0.66	-0.50	-0.41	-0.14	-0.96	-0.28

1.3 結果と考察

1.3.1 診断テスト結果の分析と考察

春学期末の7月と秋学期末の12月時点での英語運用能力のスコアを比較するために対応のあるt検定を実施した。その結果、合計通過率とリーディング力、語彙表現力の3つの能力項目におい

て1%水準以下の強い有意差が認められた。また、リスニング力においては、5%水準での有意差が確認できた。一方で、文法・構文力では、有意差が確認できなかった。(表2)。

表2 OIDAИ 英語力診断テストの項目別「対応のある t 検定」の結果一覧

項目	対応サンプルの差	標準偏差	均値の標準誤	t 値	自由度	有意確率 (両側)
合計通過率	2.780	14.348	0.414	6.715	1200	0.000 **
リスニング	0.990	15.003	0.433	2.287	1200	0.022 *
語彙・表現	-2.527	28.398	0.819	-3.083	1200	0.002 **
文法・構文	0.725	26.863	0.775	0.935	1200	0.350 -
リーディング	9.881	27.328	0.789	12.530	1200	0.000 **

表1、表2で示したとおり、秋学期末テストの合計通過率 ($M=42.9$, $SD=17.5$) と、春学期末テストの合計通過率 ($M=40.3$, $SD=14.79$) を用いて対応のある t 検定を実施した結果、 $t(1200)=6.715$, $p<.001$, Cohen's $d=.194$ となり、t 値及び p 値の数値から判断して非常に強い有意差が生じていることが判明した。このことから、7月と12月に測定した学生のリスニングとリーディングによる英語運用能力(合計通過率)は、プラス方向に上昇していることが確認でき、英語の授業が有意な影響を及ぼしていることが明らかとなった。また、その効果の程度は、Cohen の d 値から判断して、小さい (.194) ながらも一定レベルの効果がもたらされていることが確認できた (図1)。

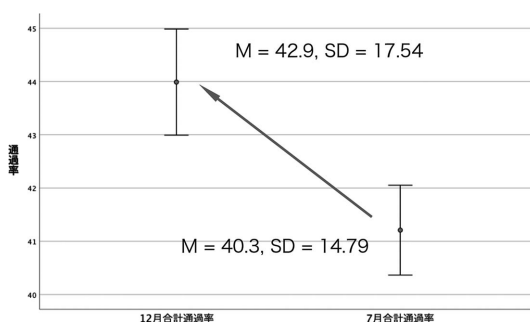


図1 合計通過率のエラーバー付きグラフ

次に、診断テスト結果を英語運用能力の4つの項目別(リスニング力、語彙・表現力、文法・構文力、リーディング力)通過率に基づき分析した結果と考察を示す。

合計通過率の向上に最も大きな影響を及ぼしたのがリーディング項目であった。秋学期末テストのリーディング通過率 ($M=47.3$, $SD=26.49$) と、春学期末テストのリーディング通過率 ($M=37.5$, $SD=22.57$) を用いて対応のある t 検定を実施した結果、 $t(1200)=12.530$, $p<.001$, Cohen's $d=.362$ となり、非常に強い有意差が生じていることが判明した。また、その時の効果量を示す d 値は、.362 となり、リーディング力に対する授業の効果として、中程度のプラスの効果量が出現していることが明らかとなった (図2)。

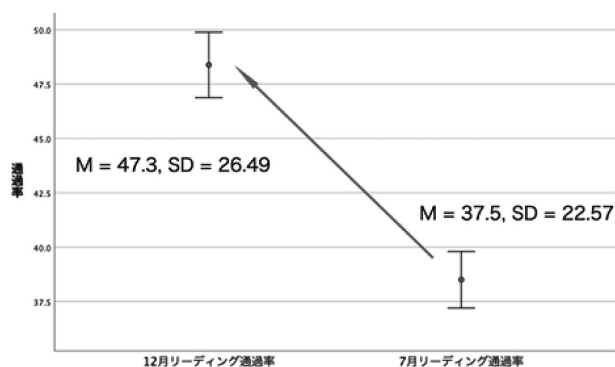


図 2 リーディング通過率のエラーバー付きグラフ

秋学期末テストのリスニング通過率 ($M=39.3$, $SD=17.56$) と、春学期末テストのリスニング通過率 ($M=39.3$, $SD=15.72$) を用いて対応のある t 検定を実施した結果、 $t(1200)=2.287$, $p=.022$, $Cohen's d=.009$ となり、5% 水準での有意差が生じていることが判明した。一方で、リスニング力の向上については、授業による効果量が、設問の難易度が 5 ポイントから 10 ポイント上昇していることを鑑みても、極めて限定的であることが示された (図 3)。

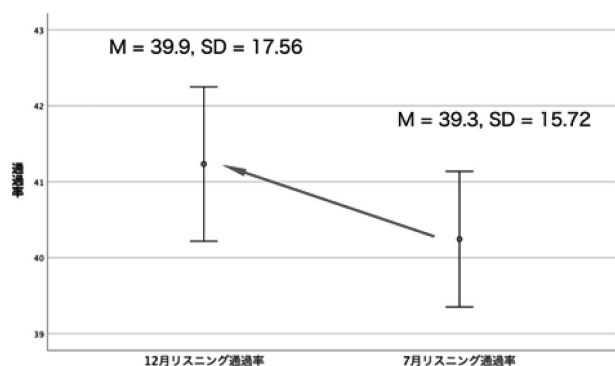


図 3 リスニング通過率のエラーバー付きグラフ

次に、秋学期末テストの語彙・表現通過率 ($M=45.7$, $SD=25.08$) と、春学期末テストの語彙・表現通過率 ($M=48.1$, $SD=24.55$) を用いて対応のある t 検定を実施した結果、 $t(1200)=-3.083$, $p=.002$, $Cohen's d=-.089$ となり、1% 水準での有意差が生じていることが判明した。また、この時の効果量は、わずかなマイナスの値 ($d=-.089$) を示しており、7月よりも12月の語彙・表現テスト項目のスコアが有意に低くなっていることが判明した。出題される語彙や表現の難易度が高くなっていることを勘案しても、診断テスト結果に影響を及ぼすことができるレベルの語彙・表現学習を一層強化することとが求められる (図 4)。

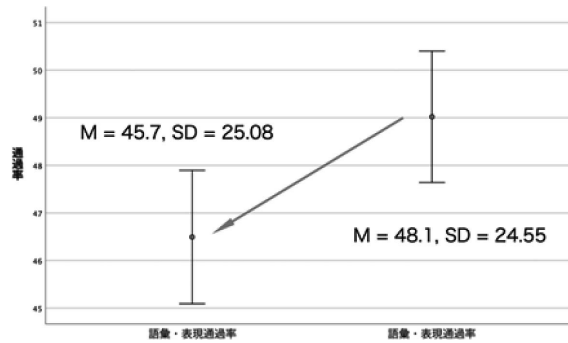


図4 語彙・表現通過率のエラーバー付きグラフ

なお、文法・構文力においては、秋学期末 ($M=42.7$, $SD=24.81$) と春学期末 ($M=42.2$, $SD=22.9$) の通過率を用いた t 検定では、有意差が確認できなかった ($p=.350$)。また、この時の効果量は、 $d=.027$ と小さかったものの、難易度を考慮すると、一定レベルの効果はあったものと考えられる (図5)。

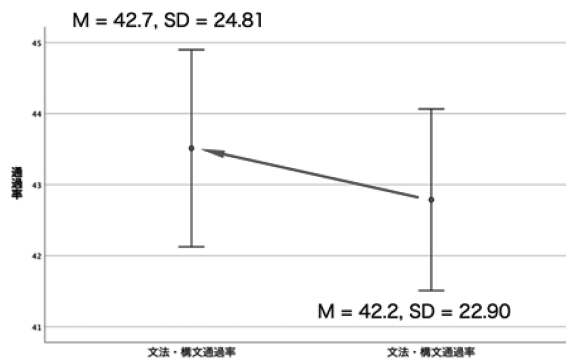


図5 文法・構文通過率のエラーバー付きグラフ

以上の、結果・考察から、今後の授業改善へ向けて次の3点が明らかとなった。

(1) 語彙力・表現力の拡充

総合英語及び Online English Seminar の各授業を通じて、CEFR A2 から B1 レベルの語彙・表現を発表語彙・表現 (productive vocabulary & expressions) として定着させ運用することができる能力を育成する。そのために、最適化された口頭発表やエッセイライティング等の学習機会を提供すること。また、CEFR B1 レベルから B2 レベルの語彙・表現を、受容語彙・表現 (receptive vocabulary & expressions) として理解することができる能力を育成するための教材の開発や、系統的な語彙・表現力テスト等を提供をすることが望まれる。

(2) 文法・構文力の伸展

学習する語彙・表現数と比較すると、取り扱う文法・構文数は圧倒的に少ないものの、中学校で

学習すべき文法事項が十分に定着できていない学生が散見されることから、使用する教材を用いて必修文法事項の理解と定着を図るための教授・学習方略を工夫することが求められる。そのためには、授業内で一斉学習の形態でリメディアルな学習を展開するのではなく、一人ひとりの学生の状況に応じたオンライン追補教材等を用いた個別学習や自己管理型の授業外学習等を拡充することが望まれる。

(3) 四技能を統合した学習の展開

診断テストの合計通過率に最も大きな影響を及ぼしている要因がリーディング能力であることから、Receptive Skills としての「読むこと」と「聞くこと」と、Productive Skills としての「書くこと」と「話すこと」の四技能を、「読むこと」を中心に有機的にリンクさせ統合させた言語活動を展開することが効果的であると考ええる。

(統合的な言語活動の展開例)

「読む」前に「聞く」、聞いた後に（聞くことによって得られた情報に基づき）再び読み、その情報を修正する。また、読んで得られた情報に基づき、その内容や与えられたテーマについて「書く」。書くことにより、その理解内容を整理したり、理解を深めたり、概念を構造化する。その後、わかりやすい英語を用いて「話す」ためのリハーサルを行う。リハーサルを行った上で、クラス内の学生相互で「やりとり」をする。このような統合的、かつ、循環的な言語活動を授業内で展開することにより、英語四技能を統合した総合的なコミュニケーション能力の育成を図ることができる。と考える。

1.3.2 学習実施状況調査結果の分析と考察

松宮（2025）が実施した因子分析により、抽出された4因子解（グローバル意識の深化因子、英語有能因子、授業期待因子、国際挑戦・グローバル志向因子）から、第Ⅰ因子として出現し、英語、及び、英語運用能力や、コンテンツ科目として実施している総合英語の授業への期待度を底支えする因子である「グローバル意識の深化因子（以下、「グローバル因子」という。）」を用い、秋学期末診断テストの合計通過率との関係性を検証した。そのために、グローバル因子を構成する各項目データから、合成変数としてグローバル因子得点を算出し、その分布・分散に基づき、グローバル因子高得点群（G群：M=45.0、SD=18.186）、中位群（M群：M=43.4、SD=17.110）、下位群（P群：M=39.5、SD=17.186）の3群に分類し、秋学期末診断テストの合計通過率を用いた一元配置分散分析を実施した。

その結果、GMP間に有意な差が認められた（ $F(2, 1481) = 10.234, p < .001, \eta^2 = .01$ ）（図6）。また、その後の検定（Tukey HSD）の結果、G群（M=45.0、SD=18.186）とP群（M=39.5、SD=17.186）、M群（M=43.4、SD=17.110）とP群（M=39.5、SD=17.186）との間で有意な差が確認された（ $p < .001$ ）。

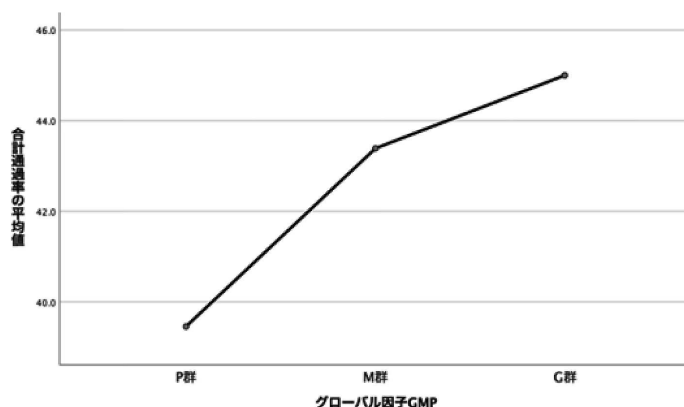


図 6 グローバル因子得点と合計通過率による一元配置分散分析

一元配置分散分析の結果から、特に、SDGsに関連した教材を用い、コンテンツ科目として実施している総合英語の授業が、グローバル因子の形成に影響を及ぼす程度のインパクトを与えていることと、形成されたグローバル因子が、有意に授業への期待度や英語学習に対する意欲を高め、結果として、合計通過率に一定レベルの影響を及ぼしていることが明らかとなった。

このことから、SDGsをテーマとしたコンテンツ科目の特性を活かした総合英語の授業は、有意に学生の英語運用能力の育成に寄与しているものと考えられる。

1.4 まとめ

本研究では、2024年度に実施した秋学期末診断テストと春学期末診断テストの通過率と、英語学習実施状況調査のデータを用いて、総合英語と Online English Seminar の授業効果を検証するとともに、共通教育機構の英語関連科目に関わるカリキュラムの評価を試みた。

その結果、春学期末診断テストと比較して各問題項目の難易度を5ポイントから10ポイントのレンジで高めた秋学期末診断テストとの間には、文法・構文力の通過率を除き、強い有意差があり、通過率が有意に変動したことが確認できた。特筆すべきことは、リーディング力の伸びが顕著であることと、難易度の違いを考慮したとしても、語彙・表現力がマイナスの伸びを示したことである。このことから、リーディングをカギとした、四技能統合・循環型の授業運営の在り方と、授業改善へ向けての課題として、語彙・表現能力の育成を行うために、受容語彙と発表語彙の学習を有機的に連動させた口頭発表やエッセイライティングを含む授業展開や課題タスクに関する授業内容の充実や工夫、及び、指導方法の改善が必要であることが明らかとなった。

2. 「総合英語1・2」「Online English Seminar 1・2」「Online English Seminar 3・4」の授業実践報告（稲富）

共通教育機構が1年次に開講する「総合英語1・2」（対面授業）と「Online English Seminar 1・2」（オンデマンド授業）は、両者をセット科目として位置づけ、英語4技能の向上を目指してい

る。これまでの両科目の授業実践について、過去 3 年にわたって報告を行った。具体的には、「基盤教育機構外国語科目のカリキュラム改編に伴う教育効果の検証について（初年次報告）－授業展開事例と「OIDAI 英語力診断テスト」の実施検証－」、「共通教育機構の新英語カリキュラムによる学習成果の検証－OIDAI 英語力診断テストの分析結果から－」（2022 年度報告）、「OIDAI 英語力診断テストと授業実施状況調査に基づく授業評価と授業実践報告」（2023 年度報告）である。

今年度、新カリキュラムは 4 年目を迎えた。本章では、稲富担当クラスの「総合英語 1・2」の授業展開例、主に毎週の課題の一つである「エッセイ（ライティング課題）」の展開例、そして、「リフレクションシート」を通して得られた学生たちの声を紹介していきたい。また、「Online English Seminar 1・2」については、今年度、EdulinX 社主催のオンラインセミナー「正課授業での e ラーニング活用事例セミナー」にて講師の一人として登壇した際の発表内容に触れていく。さらには、今年度から 2 年生以上を対象に新たに開講された「Online English Seminar 3・4」（オンデマンド授業）について報告する。

2.1 「総合英語 1・2」について

「総合英語」では、Web 教材「ABLish」（チエル株式会社）を使用し、その中から SDGs（Sustainable Development Goals）に関連する 17 の到達目標をトピックとした記事を毎週 2 本ずつ取り扱っている。

今年度の新たな試みとして、英語の 4 技能のうちスピーキング力を伸ばすために、授業内で「英会話」の時間を確保した。内容はその週の学習テーマを扱ったミニ英会話であり、学習の導入として活用している。学生がペアで会話の練習をし、そのテーマに問題意識を持つように構成した。なお、「総合英語 1」の「英会話」は国際学部の原めぐみ講師と稲富が作成し、「総合英語 2」の「英会話」は国際学部のトーマス・ブルック講師と稲富が作成した。学生は LMS（Knowledge Deliver）上で、会話の音声を聞きながら、授業時間外でも発音練習が可能である。また、英会話だけでなく、正しい発音の習得を目指し、2 本の記事について、単語やイディオム等の発音練習ができるように、発音練習のための音声ファイルも LMS 上に公開し、教材のさらなる充実を図った。

まず、提出課題のひとつである「リフレクションシート」の活用例について、これまでも報告してきたが、英語の「エッセイ」とは違い、授業で学習したテーマについて、学生の率直な意見や感想を知ることができる。稲富のクラスでは、それらを PowerPoint にまとめ、翌週の授業の初めにピックアップして学生の意見を紹介している。その週の学習内容について、なかには疑問に思ったことを列挙・調査している学生もあり、問題点や解決策について、学生が様々な視点から思考する時間になっていることが分かる。授業を通して、政治・経済・環境について関心を持ち、世界のニュースを見る機会が増えたという感想も寄せられた。授業で扱うテーマは、戦争、貧困、環境問題などそれぞれのテーマは重いが、世界のどこか遠い場所で起こっているという傍観者の立場ではなく、身近で切実な問題として思考する訓練の場になっていると感じられる。また、学生の感性の豊かさに心打たれることもある。たとえば、SDGs 目標 16「平和と公正」について、ABLish 上に関

連資料として公開している動画鑑賞後の学生の感想を以下に引用したい。

被爆者の 80 歳の方が語った、「…、だから戦争はだめなの」のロジックが、わかりやすく、そうだなと理解ができて、心にじっくり来たといいのかわからないのですが、これを絶対に忘れてはならないと感じました。絶対的な正義はないと言われるとそうかもしれませんが、絶対にやってはならないことはあるだろうと思うのです。(原文ママ)

なかには、各テーマについて意見を述べることの難しさを次のように書いている学生もいた。

最近は正しいか正しくないのかはっきり言うこと（主張すること）に恐怖を覚えるようになってきました。その感情主張に合致した言葉を使っても鋭利な気がするし、かといってごまかした言い方をすると「正解」じゃない気がするし、答えが難しいと感じました。(原文ママ)

このように、試行錯誤しながら意見を書く学生の姿勢は、「リフレクションシート」という課題一つにしても、学生から学ぶ点は多い。また、繊細な学生への配慮が求められる場合があり、学生の意見を受け止め、コメントを返すことも必要である。他にも、毎週のエッセイの解説について、クラスメイトのエッセイの構成の仕方が参考になっているという感想もある。また、エッセイの解説（フィードバック）の時間に、指名されて上手く答えることができ嬉しかったという声も聞かれ、学生同士が学び合う時間になっていることが、リフレクションシートの記述から理解できる。

次に、「エッセイ」の課題について、稲富のクラスの実践例を挙げたい。エッセイは PowerPoint で提出させ、毎週全員分を授業内で公開する。序論・本論・結論を意識した英語の文章構成や、グラフ・図・写真を使用し読み手を惹きつける工夫等、回を重ねる度に上達している学生が増えている。これは、「総合英語テキストノート」の巻末に掲載しているライティングのモデルエッセイや、アウトラインの書き方等の各資料を、可能な限り参考にするよう指導を行った成果でもあろう。春学期は、教員が中心に解説を行う形式を取ったが、秋学期は、数名の学生を指名し、学生が自分自身のエッセイのポイントを説明する形式も取り入れた。一つのテーマに限っても学生の数だけ視点があるが、身近な問題から調べ、国内外の企業や地方自治体の取り組みに至るまで視野を広げ、環境保全のために実践できる例を紹介する学生が多い。毎週「エッセイ」のトピックについて思考し、意見を整理する過程で、読み手に分かりやすい文章構成や、効果的にアウトプットする力が養成されている。そして、教員が毎週授業内で学生のエッセイを共有する時間を確保することで、学生にとってエッセイの書き方を学び合う場に繋がっている。昨今の機械翻訳や生成 AI、また剽窃の問題について、これまでの報告書でもまとめてきたが、学生にはルールを遵守するよう根気強く指導する必要がある。そして何よりもまず、テーマに向き合い、考え、そして、自身の意見をクラスメイトと共有することの楽しさをこの授業を通して感じてほしいと願っている。エッセイの集大成が、学期末に実施するプレゼンテーションであり、SDGs をテーマに、個人・ペア・グループの

形式で実施している。ピアレビューを通して学生はクラスメイトからの評価を知り、改善点を含め、今後の良質なアウトプットの機会に繋げていくことが期待されている。

2.2 「Online English Seminar 1・2」について

「Online English Seminar 1・2」では、これまでとほぼ同じ形式で授業を展開している。eラーニング教材「Practical English 8: Adaptive Focus」(EdulinX)を継続使用しており、さらにLMS (KnowledgeDeliver)上で「1. 学習の指針 (音声付き)」、「2. Newsletter」、「3. 語彙・表現テスト」、「4. This Week's Idiom (音声付き)」、「5. TOEIC に挑戦! (リスニング対策)」、「6. ラーニング・ログ (学修記録)」、「7. 語彙表現テスト用リスト」の課題を毎週公開し、学生は毎週「学習の指針」を確認の上、*Newsletter*を読み、公開された全ての課題に取り組むことが求められている。

今年度は、学生の基礎的な英語のスキル、特に文法力の向上に関する改善の要望を受け、「Online English Seminar 1・2」では、「Practical English 8」の受講レッスンについて変更を行った。昨年度までは、半期(13週)25レッスンの受講を設定していたが、今年度からは毎週「グラマー」を1レッスン増やし、半期38レッスンの受講へと変更した。これは、上位クラスのみならず、下位層の学生のレベルアップを図るための対策の一環である。この変更に際して、「Practical English 8」のスキル(グラマー・リーディング・リスニング)の中から、グラマーのみレッスン数を単純に増やすのか、あるいは、他社のオンデマンド教材の中から、グラマーに特化した教材を新たに追加するのかを検討することから始めた。教材の選定にあたって、他社から文法学習用教材のデモアカウントを発行してもらい、日野信行教授と稲富で意見交換を行った。その結果、「Practical English 8」の方が、各学生のレベルに応じてアダプティブに問題が抽出される点と金額の面で好ましいという点で一致し、総合的に判断した。毎週1レッスン追加されることで、学習時間は自ずと増えているが、興味深いことに、今年度春学期の「Practical English 8」の修了率は昨年度の春学期と比較すると11%上昇しており、このことから、一定の学習効果が期待できるだろう。なお、今年度秋学期の修了率については現時点でEdulinX社からの報告が完了していない。次年度以降もこの形式で運用していく。

次に、EdulinX社が2024年8月27日に開催したオンラインセミナー「正課授業でのeラーニング活用事例セミナー」(https://service.edulinx.co.jp/seminar/freeseminar20240827_academic)にて講師の一人として稲富が発表した内容について報告する。登壇者は、星薬科大学薬学部所属の阿川敏恵教授、大阪大学マルチリンガル教育センター所属の岡本清美講師、そして稲富の3名であった。講演内容は、前半は英語eラーニング教材「Practical English 8」の活用事例(シラバス設計、教材選定、運用方法、成績評価、導入の成果・課題など)の活用状況を共有し、後半はパネルディスカッションとして、いくつかのトピック(運用面・コンテンツ面・学習サポート面)について重点的に議論を展開し、最後に質疑応答で締め括られた。限られた時間内に全てを語ることはできないため、各講師の発表用PowerPoint資料がセミナー参加者に後日配信された。

多くの大学が抱えている共通の問題点は、大人数の受講者の学習管理と指導方法についてであっ

た。この点については、本学では、半期に2回（5週目と10週目）、EdulinX社から発行される成績レポートに基づき、各教員から学習不振の学生に対して指導を行っている。また、対面授業の「総合英語」にて直接学生に指導していることから、「Online English Seminar 1・2」と「総合英語 1・2」がセット科目であることの利点を強調することができた。特に、半期2回の調査時に定められたレッスン数を終了していない場合には、減点対象となるというルールをシラバスに明記し、成績の重み付けを行っている。これは受講者の駆け込み学習を防ぐために有効である。さらに、必要に応じて、各学部の教務課のスタッフやアカデミック・アドバイザー教員からの指導を依頼する場合があります。本学ではEdulinX社との連携および学内のサポート体制を確立していることを紹介した。また、学生からの各問い合わせへの対応方法の事例も紹介した。LMS上の公開用資料を充実させていること、たとえば、学生自身が、課題進捗のチェック表を用いて毎週学習管理を行い、自律学習を確立させていること、また、毎週発行している *Newsletter* が、学生と教員を繋ぐ有益なチャンネルになっていること、そして、毎週ラーニング・ログの提出を課すことなど、eラーニング教材の学習理解を深化させるために取り組んでいる本学独自の運用スタイルについて発表した。

昨年度秋学期からの試みとして、毎週LMS上でTOEIC® L&R Test対策用のリスニングの練習問題を公開したが、今年度は、春学期と秋学期それぞれにTOEIC® L&R Testの練習問題を毎週作成・公開した。これは、他学部からのTOEIC対策の要望に応える形で始めたもので、同時に、学年末実施のTOEIC Bridge® L&R Test（希望者受験）や学期末実施のOIDAI英語力診断テスト（全員受験）の受験を見据えたものである。練習問題は稲富を中心に、日野信行教授、アリザデ・メラサ准教授と作成している。しかし、毎週継続して練習問題に取り組んでいる学生数が伸び悩んでおり、それは、成績評価に入らないことが要因として考えられるが、次年度以降の課題として対応策を考えていく。

Newsletter にはE-CO（English Café at Otemon）の活動に関する案内を毎週キャサリン・ソーントン准教授に依頼している。E-COの活動は多岐にわたっており、各プログラムへの学生の関心は高い。多くの学生がE-COのプログラムに参加し、継続して参加できる体制作りについて模索しつつ、「総合英語」や「Online English Seminar」の授業にて積極的に案内を続けていきたい。

以上が、「総合英語」と「Online English Seminar」の授業実践事例の報告である。英語チームでは、FDやアンケート等を通して得られた担当教員の意見・要望を取り入れながら教材開発を継続し、問題点を洗い出し、学生の学習効果を上げるために知恵を出し合い、今後も改善を図っていく。

2.3 「Online English Seminar 3・4」の初年度実施報告

2024年度から、共通教育機構では、2年生以上を対象とした「Online English Seminar 3・4」（選択科目1単位）を開講した。120名定員で1クラスのみの開講としていたが、履修希望者が多く、抽選となった。

「Online English Seminar 3」では、TOEIC®やIELTS™等のグローバルスタンダードな英語能力検

定試験等での高得点取得を可能とする4技能に関わる応用的な英語運用能力の育成を図ることを目指している。具体的にはCEFRのレベルB2-C1程度（英検準1級から英検1級下位レベル）の英語運用能力の獲得を目標に、応用的な語彙・表現や文法項目の理解学習及び定着のための言語活動を重点的に実施している。

「Online English Seminar 4」では、さらに、4技能に関わるプロフェッショナルなレベルの英語運用能力の育成を図ることを目指している。具体的にはCEFRのレベルC1-C2程度（英検準1級上位から英検1級レベル）の英語運用能力の獲得を目標としている。

いずれも授業で用いるeラーニング教材は、学生の英語運用能力や到達度に応じてアダプティブに学習材料が提供されるものを利用することとし、EdulinX社に、本科目に適した教材をカスタマイズし、運用案を複数提示していただいた。「Online English Seminar 3」受講者向け教材は、「アカデミック・イングリッシュ スタンダード」、「Online English Seminar 4」受講者向け教材は、「アカデミック・イングリッシュ アドバンス」という本学仕様の名称である。具体的には、本科目の目的に沿うよう、アダプティブフォーカスを活用しつつ、アカデミックコースからピックアップし、半期完結科目として、半期（13週）で50レッスン受講するようデザインされたものである。「Online English 1・2」よりもレベルアップした内容にすべく、教材のレベルは上位レベルのみに設定し、アダプティブ教材（「Practical English 8」）を38レッスン、そしてアカデミック教材（固定レッスン：「Academic English」および「IELTS coach for 4 skills」）を12レッスン組み合わせた。EdulinX社との打ち合わせを重ねたことにより、資格試験対策コースを受講する学生の要望に叶う教材運用が可能となった。

eラーニング教材の学習とともに、LMS上で課している「ラーニング・ログ」から、特にIELTS対策では、難易度が高く、苦戦している受講者の様子が窺えた。たとえば、ライティングやスピーキングでは、受講者は時間内に完成させることの難しさに直面し、自身の弱点を認識するきっかけになったようである。「ライティングのテストで高得点を取るには、一貫性と結束性、語彙力、文法の知識と正確さが大事だと学び、国語力も英語力も向上していかなければならないと感じた」という感想や、スピーキングのテストについては、「アルバイト先での外国人とのコミュニケーションとしての英会話と違い、自身で内容を構成して話すことの難しさがあった」という意見が出ていた。

一方で、教材の内容の面白さに満足し、少しずつ英語のスキルが上達するのを実感し、それが学習を継続するモチベーションに繋がったという感想や、英語を学ぶことで、多くの情報や文化に触れることができ、少しずつ理解できる喜びが自信に繋がり、今後も学び続けることで、さらに成長を続けたいという感想や、努力を続ければ続けるほど、自分の世界が広がる感じがし、とてもやりがいがあるという感想が寄せられた。

このように、ラーニング・ログの提出を促すことで、受講生は毎週の学習を丁寧に振り返り、自身のスコア・解答を冷静に分析している。また、本科目では、「Online English Seminar 1・2」のeラーニング教材の受講レッスン数の倍となって、そのため「毎週早めに課題に取り組む習慣が付き

た」という声や、「目で見て成績が分かるシステムのおかげで私は英語に対する姿勢を最後まで崩すことなく続けられた」という声が聞かれた。本科目を受講することで、楽しく学習を進めながら、多くの知識を得ることができ、大変勉強になったと振り返っている学生も多くいた。

本科目を受講している学生は、資格試験対策や海外留学・旅行を目標に掲げており、英語学習の必要性を認識しているが、なかには、1年次の必修英語を受講して以来、初めて英語に触れたため、英語の力を取り戻すのに半期の時間を要したという者や、2年次以降、英語学習の機会の少なさへの危機感を抱いていた者がいたことから、本科目の履修希望者の多さの理由が垣間見えた。ちなみに、本学では、2年生以上の英語科目については、共通教育機構が開講するのは英語ネイティブ教員による「Advanced English 1・2」（選択科目）のみであり、それ以外は、各学部が独自に開講している英語科目がある。

今年度、共通教育機構では、「Online English Seminar 3・4」あるいは「Advanced English 1・2」を受講した学生には、学年末に TOEIC® L&R Test の受験を推奨した。受験料は大学の予算で負担した。開講初年度の「Online English Seminar 3・4」の成果としては、受講者に満足いく英語学習の機会を提供し、着実に英語力を養成させ、さらに英語力の上達を目指すモチベーションへと発展させたことが挙げられる。

この一年を通して、本科目の必要性は、学生の声を通して明らかになったことであり、その声を届けるべく、教務課と打ち合わせを行い、その結果、2025年度は本科目を2クラス開講することになった。また、以前から共通教育機構が開講している、英語ネイティブ教員による英語選択科目「Advanced English 1・2」も次年度は1クラス増やし、2クラス開講し、さらには、英語ネイティブ教員による英語選択科目「Academic English 1・2」を新たに1科目開講することにした。また、「Japan Program」についても、共通教育機構が開講する科目として、多くの学生の参加が期待されている。これらの科目実施の成果については、次年度以降報告をしていく予定である。

最後に、対面授業やオンライン授業を通じて学生を指導していただいている専任、常勤講師、非常勤講師の皆様の本学の英語教育へのご理解とご尽力に、深く感謝の意を表したい。

3. 2024年度英語FD研修報告（日野）

本学の共通教育の英語教育におけるFD（Faculty Development）研修に関し、松宮・稲富・日野・原（2024）では昨年度（2023年度）の状況を中心に報告した。以下では、本年度（2024年度）の活動に重点を置いて述べる。

3.1 2024年度英語FDの概要

本学では、全学の専任・常勤教員を対象とするFDや、英語に限らない共通教育機構の専任・常勤教員全員を対象とするFD等も実施されているが、統一シラバス・統一教材を用いる本学の共通教育における英語必修科目の円滑な運営のためには、チームとしての綿密な打ち合わせが特に重要であり、英語チーム独自のFDにも力を入れている。したがって、英語FDの対象者は、専任・常

勤の教員だけでなく非常勤教員も含む。英語 FD は、英語チームリーダーの稲富准教授を中心に実施している。

本学は、春学期と秋学期の2学期制である。英語 FD は、従来より、年度開始を待たず3月から実施している。共通教育における英語必修科目である「総合英語」(対面)と Online English Seminar (略称 OES, オンデマンド) は、上述のようにいずれも統一シラバス・統一教材による授業であり、担当教員の全員が授業開始日までに様々な要領やルールを身につけておく必要があるため、3月から FD を始めることは非常に重要である。

本年度の英語 FD は、基本的にオンライン (Zoom) で実施した。年度開始前の3月には、まず、3月13日 (水) に新任教員を対象として授業運営等の説明会を行った。たとえば、「総合英語」の科目については、まず主教材であるウェブ教材 ABLish に関し、各クラスの領域を設定する方法をはじめとして、ABLish でのクラス管理の方法等についての説明が行われた。そして、総合英語での ABLish 及び OES の主教材である Practical English 8 を補完する形で活用している LMS (Learning Management System) である KnowledgeDeliver についても、英語チームリーダー (稲富准教授) から毎週配信されるクラス用の諸課題 (「表現演習」「エッセイ」「語彙・表現リスト」その他) を各クラスの領域に取り込む方法から始まり、課題の採点・コメントの方法等の説明があった。またこの会の中で、Practical English 8 のベンダーである EdulinX のスタッフの方からも、使用方法に関する説明をいただいた。いずれの科目についても、初めて担当する教員が学ぶ必要のある事項は数多くある。

さらに3月22日 (金) には、共通教育の必修英語を担当する専任・常勤・非常勤すべての英語教員に参加を要請し、教員の顔合わせも兼ねながら、総合英語と OES の授業運営を中心とするオリエンテーションと話し合いを行った。打ち合わせ事項の一例を挙げると、たとえば総合英語では、ほぼ毎回の授業の冒頭で、前週の授業での学習内容に関する「復習テスト」を行っているが、その解答において学生に資料の参照は認めない、という方針が必ずしも徹底されず、クラス間での不公平が生じるケースがあったため、他のクラスの状況を知った学生から不満が出るがあった。3月22日の FD では、この点に関して、復習テストにおいては資料の参照は許可しない、という方針の確認を行った。

同日の FD ではまた、稲富准教授が、新任教員による授業の円滑な開始を支援するために、自身の作成した初回授業用スライドを共有し、さらに、多くの教員にとって悩みであるエッセイ (ライティング) 指導の教授手順の例を示すなど、授業実践のための具体的な参考例を提示した。

次に、春学期の授業終了直後の7月18日 (木) にも英語 FD を実施した。その主な内容は、成績評価の方法に関する申し合わせであった。現在の本学においては、英語に限らず全学的な方針として、期末試験という伝統的な方法ではなく、毎回の授業における課題等の得点の積み重ねにより評価を行うことになっているが、総合英語と OES では大学のこの方針を徹底した形で実行している。毎回の授業の数多い課題のそれぞれについて配点を細分化した精緻な評価方法である。そのためあって、全クラスで公平な評価を行うためには、採点の基準や方法について教員間の意思統一

が必要であり、同日の FD ではその確認に重点が置かれた。特に当該の学期は、事情により学期途中で担当者が交代することとなったケースがあり、それらのクラスの学生の成績評価に関する打ち合わせもこの FD で行った。

秋学期開始直前の 9 月 25 日（水）にも、英語 FD を開催した。この FD では、秋学期に向けての英語教員間の打ち合わせに先立ち、国際学部長松宮新吾教授に御講演をお願いした。松宮教授は、現在の本学の英語教育プログラムの創設において中心的な役割を果たされ、また OIDAI 英語力診断テストの立ち上げから現在に至る実施まで、引き続きご尽力をいただいている。

この日の松宮教授の講演では、春学期に行った OIDAI 英語力診断テストの結果の分析、そして総合英語と OES の授業の理念に関する解説があった。後者では、本学の英語授業は認知能力と非認知能力の両方を視野に入れているというお話が特に印象的であった。FD 参加者の教員にとって、松宮教授の講演は、自分たちの授業の成果を実証的なデータの分析を通して知るとともに、授業の目的や意義についてマクロ的な視野から振り返る意味で、非常に有意義であった。

3.2 英語授業における課題

英語 FD で話し合ったテーマは多岐にわたるが、松宮・稲富・日野・原（2024）で提示したいいくつかの課題との関連で、ここでは 2 点についてごく簡単に述べる。

その第一は、統一シラバス・統一教材を用いる授業において、各教員の個性や独創性をどのように発揮できるか、という点である。これについて日野は、教材と教授法を分離して考えることを提案している。実際、本英語プログラムにおいて、授業のコンテンツは統一的に規定しているが、具体的な教え方については多くの部分で各教員の裁量に委ねている。たとえば総合英語において、英文和訳を行うか英問英答に重点を置くか、また音読を重視するかシャドーイングを活用するか等は、各教員の持ち味や各クラスの状況によって異なった実践が可能である。

第二に、学生の AI（Artificial Intelligence）使用に教員はどのように対応すべきかという点である。FD でも意見交換が行われたが、この問題については、現在のところ、当英語プログラムでは統一した方針を打ち出すには至っていないのが実情である。しかしながら、AI 自体が日々進化している現実を鑑みると状況はまことに流動的であるから、タイでの国際シンポジウム（チュラロンコン大学・タイ教育省共催）において Hino, Rodriguez, Kongpolphrom, and Meniado（2024）が指摘したように、朝令暮改に陥ることを避けるためには、方針の性急な確立には慎重であることはやむをえないとも言えるであろう。

4. 「総合英語 1・2」におけるライティングの指導と評価方法：課題と可能性（アリザデ）

本章では、追手門学院大学の 1 年次必修科目である「総合英語 1・2」における評価の構成について述べる。本授業では、総括的評価（サマティブ・アセスメント）だけではなく、形成的評価（フォーマティブ・アセスメント）も採用している（Phakiti & Leung, 2024）。このアプローチに基

づき、学生は語彙、ライティング、学習の振り返りなど、さまざまなスキルや要素を含む課題を学期中に提出し、その結果をもとに評価される。この形式を採用することで、学期末試験の成績が悪かったために単位を落とすといった事態を避けることができる。各課題が最終成績に占める割合はシラバスに明記されており、CAMPUSSQUARE を通じて学生と共有されている。

本稿では、ライティング課題とその評価方法に焦点を当てる。まず、ライティング課題の現状と評価方法を概観し、次にライティング指導に関する研究を参照しながら、代表的な二つのアプローチを紹介する。その後、本授業のライティング課題がそれらのアプローチとどのように関連しているかを検討し、最後に現行の課題を整理した上で、改善策を提案する。

「統合英語 1・2」では、12 週間の授業期間中、SDGs（持続可能な開発目標）のいずれかに関連する 2 本の英文記事を毎週扱う。学生は、記事の内容について議論し、授業内で精読を行った上で、複数の課題に取り組む。その中の一つとして、関連するテーマについて短いエッセイを執筆する課題がある。エッセイのテーマは統一シラバス・統一教材のため、全クラス共通であるが、具体的な課題内容は担当教員の裁量に委ねられている。一部の教員は日本語と英語の併用を許可する一方で、英語のみでの執筆を求める場合もある。また、エッセイの提出形式も異なり、Microsoft PowerPoint を使用するクラスもあれば、Microsoft Word を採用するクラスもある。ライティング課題の成績は、最終成績の 15% を占め、学期中に計 12 回の提出が求められる。

学生が LMS（2024 年度現時点では Knowledge Deliver）を通じて課題を提出し、締切が過ぎた段階、教員は LMS から提出物をダウンロードする。図 1 で示している通り、Knowledge Deliver では、すべての提出物を一括で圧縮フォルダとしてダウンロードすることが可能である。このフォルダを展開すると、学生ごとのサブフォルダが含まれており、併せて CSV ファイルが生成され、成績やコメントを記録できる。教員は、この CSV ファイルを編集し、LMS にアップロードすることで成績を一括更新する。

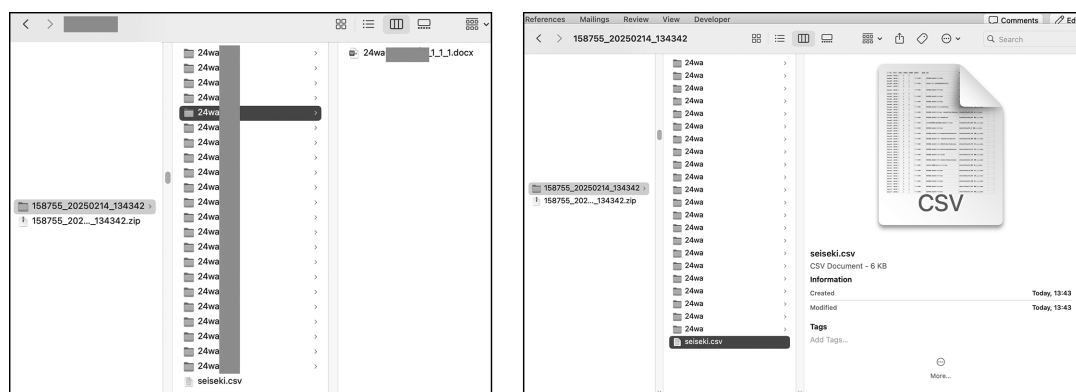


図 1 エッセイ課題の出力ファイル一覧
※プライバシー保護のため、学籍番号が非表示になっている

次に、第二言語・外国語としての英語ライティング指導における代表的な二つのアプローチにつ

いて述べる。Hyland (2003) によれば、ライティング指導方法は大きく「プロダクト・アプローチ」と「プロセス・アプローチ」に分けられる。プロダクト・アプローチでは、学生はモデルテキストを読み、それを模倣しながら執筆する。この方法では、ビジネスレターや E メールなどのジャンルごとに固定された形式を学習し、それに沿った文章を作成することが求められる。作成された文章は最終的な成果物と見なされ、第一稿がそのまま評価の対象となる。このアプローチでは、主に言語の正確性に重点を置いたフィードバックが提供され、内容や構成に関する指導は限定的である (Kerr, 2024)。

一方、プロセス・アプローチでは、ライティングを一連の反復的なプロセスと捉え、ブレインストーミング、計画、執筆、推敲、編集といった段階を経て文章を完成させる。この方法では、最終的な成果物だけでなく、その過程においてもフィードバックが提供される。これにより、学生は単なる評価を受けるだけでなく、指導を通じて文章を磨き上げる機会を得る。このアプローチは、最終的な成果物だけでなく、執筆プロセスそのものを重視する点に特徴がある。

本学の英語カリキュラムにおけるライティング指導および評価方法を分析すると、主にプロダクト・アプローチに基づいていることが分かる。このアプローチは、学生に一定のライティング練習を提供できるが、いくつかの課題も懸念される。

課題 1 タスクの難易度と学生の英語力の不一致

ライティング課題は、手紙からエッセイまで幅広いジャンルを対象としている。しかし、CEFR (Council of Europe, 2020) の枠組みに沿って考えると、本学の学生の多くは A1 または A2 レベルに相当する。このレベルの学生が SDGs 関連のトピックについて独自に執筆することは、難易度が高すぎると思われる。そのため、適切なスキャフォールディングを提供する必要がある。例えば、文構造の練習を行った後に段落やエッセイへと発展させる指導が求められる。また、モデルテキストを参考資料として活用することも有効である。

課題 2 機械翻訳や生成 AI の不適切な使用

Google 翻訳、DeepL、ChatGPT などの技術ツールが広く普及したことで、学生は簡単に AI を利用してライティング課題を作成できる。その結果、多くの学生が AI による文章をそのまま提出するケースが増えている。これは学問的誠実性の観点から問題があるだけでなく、学習機会の喪失につながる。現在、総合英語の授業で主にプロダクト・アプローチでは、教員が減点や成績評価を行う以外の対策が難しく、結果としてこの行為が常態化し、学習の形骸化を招いている。

改善策

これらの課題に対応するため、ライティングの最終成果物だけでなく、そのプロセスにも焦点を当てるべきである。執筆は反復的なプロセスであり、複数のドラフトが必要となる。そのため、週ごとの課題提出ではなく、授業開始時からブレインストーミング、計画、執筆、推敲といった段階

を経るよう指導方法を見直すべきである。第一稿にはピアレビューと教員のフィードバックを行い、学生が推敲を重ねられるようにする。このアプローチは、技術ツールの使用を完全に排除するものではなく、むしろそれらを学習の補助として活用する方法を指導することにつながる。学生が文章を見直し、推敲する機会を増やすことで、より実践的なライティング能力の向上が期待できる。

引用・参考文献

- 松宮新吾 (2025). 「大学英語の授業改善へ向けたエビデンスを得るための分析手法に関する一考察」『国際文化研究紀要』第3号, 追手門学院大学国際学部 (掲載予定).
- 松宮新吾・稲富百合子・日野信行・原めぐみ (2024). 「OIDAI 英語力診断テストと授業実施状況調査に基づく授業評価と授業実践報告」『追手門学院大学共通教育論集』第2号, pp.131-151.
- 松宮新吾・稲富百合子 (2023). 「共通教育機構の新英語カリキュラムによる学習成果の検証－OIDAI 英語力診断テストの分析結果から－」『追手門学院大学共通教育論集』第1号, pp.199-212.
- 松宮新吾・稲富百合子 (2022). 「基盤教育機構外国語科目のカリキュラム改編に伴う教育効果の検証について (初年次報告)－授業展開事例と「OIDAI 英語力診断テスト」の実施検証－」『追手門学院大学基盤教育機構論集』第9号, pp.185-205.
- Council of Europe. (2020). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, and assessment – Companion volume*. Council of Europe Publishing. <http://www.coe.int/lang-cefr>
- Hino, N., Rodriguez, J. C., Kongpolphrom, W. & Meniado, J. (2024). Re-humanizing, re-conceptualizing, and re-imagining language teaching and learning for Education 5.0 (Invited panel discussion). 2024 Post-RELC Seminar, Chulalongkorn University & Ministry of Education (Thailand), Siam at Siam Design Hotel, Bangkok, March 15.
- Hyland, K. (2022). *Teaching and researching writing* (4th ed.). Routledge.
- Kerr, P. (2024). *Giving feedback to language learners*. Part of the Cambridge papers in English language learning series.
- https://www.cambridge.org/sites/default/files/media/documents/Giving_Feedback_minipaper_ONLINE.pdf
- Phakiti, A., & Leung, C. (2024). *Assessment for language teaching*. Cambridge University Press.
- <https://doi.org/10.1017/9781108934091>